

平成20年度「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	元気集落「高齢化率60%」からの挑戦
対象地域	鹿児島県南さつま市金峰町大坂地区
活動概要	<p>鹿児島県南さつま市金峰町大坂地区は、地区内の高齢化率が60%を超える地域で、地域コミュニティの維持・存続があやぶまれ、田畑の荒廃や空き家の増加、担い手不足等の問題など様々な課題を抱えているのが現状である。</p> <p>しかしながら、当地区の長谷集落においては、平成18年度からNPO法人プロジェクト南からの潮流と地域住民が都市住民との交流事業を中心とした共生協働事業に取り組んでいるところである。</p> <p>ふるさとの風景は、心の原風景である。棚田や手入れの行き届いた山林の美しい風景など、田舎の豊かな自然に対する都市住民のニーズが高まってきている。</p> <p>今回の提案事業は、歴史の伝承や自然景観の保全、地域資源を活用した地域間・世代間・都市住民との交流事業等の取り組みを通して元気な集落群のモデルを創出することを目的とする。</p>
今年度の主な取組	<p>① 大坂地区住民を主体とする大坂地区公民館と協働し、「これまで集落単位で活動をしてきたそれぞれの地域を結び付ける」連帯意識を持つことを目的として自然木を活用した道標を設置する。</p> <p>設置に用いる自然木は、地域の山々から搬出し、素朴なデザインで地域住民と手作りをし、他地域から訪ずれる人々の道標とする。</p> <p>② 鹿児島市錫山地区と隣接している当地域は、都市が有しない自然景観(稚児の滝周辺)や藩政時代の薩摩藩の坑口跡など歴史的にも名残のある地であるため、この利点を活かしながら、稚児の滝眺望所等を整備し、既存の錫山遊歩道と接道する遊歩道やトレッキングコース等を地域資源の間伐材を活用しつつ、地域住民や行政、一般ボランティア等の協働により整備し、都市住民との交流を促進する。</p> <p>③ のぼり窯設置による新たな人材づくりや物づくりに積極的に取り組み、新たな産業として段階的に育成していく。</p> <p>のぼり窯作りは、地域の陶芸家を中心に地域住民と都市住民、とりわけ若い世代との協働作業で行う。陶芸を行うには、土・水・大量の燃料(1回あたり約4t)等が必要であるが、当該地域には粘土や、水の綺麗な清流、燃料として使える雑木等の地域資源が豊富であるので、これらを活かした体験教室など交流の充実に繋げていく。</p>
活動結果	<p>長谷地区公民館で事業の作業スケジュールなどを検討した最初の一步は、モデル事業に鹿児島県内で3箇所選定された内の一つと言うことで、喜びもひとしおで、この地域がよみがえる希望に満ち溢れた瞬間であった。</p> <p>作業開始の日は、たくさんの地域住民がいろいろな思いで集まってきた。ボランティアで参加する人、日当がもらえんと思っで参加する人など、考え方は様々だったが、事業を推進する「NPO法人プロジェクト南からの潮流」の考え方が一環していたことが少しづつ浸透し、地域の草払いと一緒に形態だと気付くのにそう時間をかけなくて済んだ。</p> <p>この事業が始まると、南日本新聞と鹿児島テレビが取材に来るようになり、過疎の村が賑やかになってきた。訪れるマイカーも多くなり、子ども連れの親子の姿も見られる様になり、地域住民に少しずつ変化の兆しが見られる様になった。</p> <p>まず一つは、マスコミの取材を受けると、「今何の作業を行っているのですか。」という問いに答えなければならないが、80歳になるマスコミとは無縁の人達が名前入りで記事やテレビに出て、しっかりと自分の意見をいうようになる。鹿児島市に住んでいる子どもに電話をして、「今日テレビにでる。」など一大騒動であった。</p> <p>急に過疎の村が有名になりつつある。人々の意識変化はたわいのない所から始まった。顔が明るくなり、話すことで意欲が出てくる。もう少し綺麗にと公民館のまわりに花を植えたり、土手の草払いをしたりと、意識の変化がもたらす効果は大きい。</p> <p>まわりの集落の高齢者も遊びにくる。手伝いをする。鹿児島に住んでいる子どもたちも週末は帰ってきて手伝う。いい方に回り出している。のぼり窯の火番は自分がすると名乗りをする人も出てきて、課題がひとつひとつ解決する感がある。桜の季節・ほたるの季節・夏とこの地を訪れる人が増える予感がする。作業中にもかかわらず9月から1,000人以上の人がきてると長谷の長老が話してくれた。</p> <p>過疎の村でも、そこに住んでいる人がいる。何か目標を提示すると待ち構えた様に元気になる。元気集落「高齢化率60%」からの挑戦は、当初設定した以上に地域の課題の解決に向けた有効な対策となりえた感がある。</p>

<p>当初予想していなかった効果</p>	<p>地域住民が元気になったこと。毎日毎日会えて話しができる。池を造るにはどうすればいいか。どこから伐採しようか。いろんなことをみんなで話しをする。コミュニティ再生である。集合することで元気がでる。自分たちが出来ることを工夫してやりとげる。その喜びをみんなで味わうことが何よりの成果である。</p> <p>予想を超えるボランティア作業であったこと。道標にしても伐採・伐竹作業に於いても予想以上に時間を要したこと。のぼり窯等にも予想以上の時間を要したこと。ボランティアの延べ人数400人。よくやり遂げたという達成感はみんなにもある。一年目の勢いでやり遂げたが、今後はもっと計画的にやって行きたい。</p> <p>鹿児島国際大学経済学部地域振興を勉強している学生が新聞記事等で過疎の村に目をつけて、学習の対象にしてくれたこと。学問的に考え、実際に長谷集落で住民の話を聞き、そして見る。どのように若い人の目に映ったか興味がある。</p> <p>決められた日だけの作業で完了するのではという計画が崩れた時、こちらがどうこう言う前に地域住民の自主作業が始まったこと。それにつれて、鹿児島市に住む子ども(60歳以上)たちが帰ってきて、作業の手伝いを始めたことは、今後の長谷集落に明るい日差しが見えてきたのではと感じる。</p> <p>地域住民との信頼関係が大切。よく話を聞くこと、顔を合わす機会を増やすこと。それから住民が何をどうしたいのか確認作業をすること。自分たちがやりたかったことを計画すると自主作業も生まれる。する喜びが湧く。このことをいつも心に留めて取り組むことをいつも考えている。</p> <p>作業中たくさんの方々が視察に訪れている。どうしてこんな事業ができるのか。どうしてこんなに地域がまとまっているのか。事業がはじまってから、車が多くなった。駐車場をどげんかせんといかんと冗談をいう。関係者以外の車が駐車することのなかった村が活気付いている。山道を車が走っている。この地の人は不思議そうに言う。「めずらしいのだろうか」と。</p> <p>過疎の村でいろんな音がしています。この音が元気のしるしだと地域住民に話します。</p>
<p>実施状況(写真)</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>【写真】「稚児の滝」の自然体験(鹿児島市の方との散策・田舎料理での昼食会)</p>
<p>応募団体名</p>	<p>特定非営利活動法人 プロジェクト南からの潮流</p>
<p>リンク</p>	<p>http://ww61.tiki.ne.jp/~npo-kaseda/</p>
<p>部局/担当者名</p>	<p>事務局 田端 順子・田代 直樹</p>
<p>連絡先</p>	<p>0993-52-7829</p>
<p>推薦市町村名</p>	<p>鹿児島県南さつま市</p>